第 16 回 2022 年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会 2022 年 2 月 27 日

『ユリシーズ』第3部(Nostos)最初の挿話で、ブルームの帰路が描かれる。前挿話における狂乱的な空間と言語を抜けたあと、物語の語りは気取った表現や冗語、クリシェを多用するスタイルに傾向する。バット橋の袂、ループ鉄線橋の下にある御者溜まりが主な舞台となり、事実とフィクション、伝聞と噂、逸話と冒険談、思い出と歴史、英雄の(誉れなき)帰還、本物と偽物、本人と写真、食品の混ぜもの問題(adulteration)、煉瓦と石、労働が重要なモチーフとなっている。「浮浪者、放浪者、そのほか分類不可能な《人》種族」や「有象無象の人間たち」(hoi polloi)(*集英社訳では「下層民」))、二輪馬車の御者、荷揚げ人足、炭坑夫、潜水夫、清掃夫等々、社会の「底辺」にいて貧しい生活を強いられている人々の言動や生活が描かれる。ブルームとスティーヴンはこの御者溜まりで深夜1時近くまで過ごしてから、エクルズ通りに向かう。

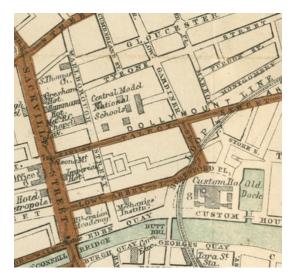


図1 第16挿話地図

ブルームとスティーヴンは娼婦街から、ビーヴァー 小路→モントゴメリー通り→(マボット通り)→ア ミアンズ通り→ベレズフォード・プレイスを通って、 バット橋袂、ループ鉄線橋の下にある御者溜まりへ とやってくる。

*Image: A & C Black map of Dublin showing main tram routes. (c. 1912) via JoyceTool, http://www.riverrun.org.uk/joycetools.html

* * *

ブルーム(以下「B」と省略)は、倒れているスティーヴン(以下「S」と省略)を助け起こし、鉋屑を払い、帽子とトネリコの杖を拾って手渡す。S が飲み物を求めていることからも、バット橋袂にある御者溜まりに二人は向かう。ループ線鉄橋の下をくぐるとき、S は父サイモンの知り合いである夜警の石番ガムリー(cf. 第7挿話)を見かけ、顔をあわさないようにするも、鉄橋の下にいたジョン・コーリーから呼びかけられる。(本当かどうかはわからないが)文無しにして家なし、失業中だという彼に無心され、S はポケットの中で探り当てた半クラウン銀貨を渡す。この成行きを離れたところから見守っていた B は心配になり、夜の街の危険や、彼の交友関係やマリガンとの付き合いについて諭し、自宅に帰ることを提案する(U- Δ 16.13-30)。

B たちは男子用公衆便所のそばのアイスクリーム屋の周りにいたイタリア人たちの口論 を聞きながら、御者溜まりに入る。注文して出された「パンのごときもの」と「コーヒーと 呼べそうな液体」を前に名前や音の響きの欺瞞性について話をしていると(cf. *U7*.484-85; 第 16 回 2022 年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会 2022 年 2 月 27 日

[MacHugh] "We mustn't be led away by words, by sounds of words.")、赤ひげをはやした水夫が話二人にしかけてくる。自称水夫は「W・B・マーフィー」と名乗り、6月 16日の 11時に寄港したローズヴィーン号を降りてきたという(第 3 挿話の終わりで S はこの船を目撃している)。絵葉書を取り出して、航海の途中で訪れた様々な場所について水夫が冒険談を披露するなか、その話を疑い深く聞く B はかねてから希望していたロンドンやマリンガーへの旅行や、アイルランドにおける観光旅行に思いを巡らす。水夫がトリエステでのイタリア人による刃傷沙汰を語るうちに、その「明らかに何も事情を知らない誰かさん」はフィーニックス公園殺人事件にうっかり触れる。すでにほのめかされていたように(U 7.***)、この御者溜まりの店主は、1882年5月6日に起こったフィーニックス公園暗殺事件で実行犯を手伝い、御者の役割を担ったと考えられている《山羊皮》ことジェイムズ・フィッツハリスであると噂されている。BとS、そして近くにいた御者たちもそのことを知っていたために意味のある長い沈黙が続く。水夫はそのことにも構わず、自分の胸にタトゥーとして彫り込まれた、アントニオなる人物について話をする。(U- Δ 16.31-54)

御者溜まりの外から(第 10 挿話でも B がみかけた)娼婦が覗き込むのをみて、B は顔をピンク色の『イヴニング・テレグラフ』紙で隠してやりすごす。娼婦の話題から宗教と科学における肉体と魂の認識論に転じ、さらに保護者を気取る B は S に「ちゃんとしたものを食べたほうがいいよ」とアドバイスをする。スティーヴンはコーヒーにだけには口をつける。そしてパンといっしょに出されたナイフの先端がローマ史を思い起こして気分が悪くなるため、自分に向けないでくれと言う。ナイフに関連して水夫が語ったイタリア人による刃傷沙汰の真偽性を法螺話として取り上げた B は続けて、イタリア人からスペイン人の気質へ、スペイン人の気質から妻モリーへと話しを広げていく。そうして二人が話しているあいだ、水夫は海上事故についての真実定かならぬ話をしていたが、ふと用を足しに御者溜まりの外へと向かう。店の外には、市の清掃委員会が設けた男子用公衆便所があったが、水夫はその付近で立ち小便をする。(U- Δ 16.55-70)

水夫が帰ってきたあとは、一同の話はアイルランド海運業の衰退に続き、多分に民族主義的な偏りを含んだ天然資源についての長い演説が山羊革によって語られる。昼間の出来事を思い出した B が「市民」とのやりとりを S に語り、自身の暴力と不寛容に対する嫌悪を表明すると、S もそれに同意する。B は続けてユダヤ人の問題から経済と労働について触れる。ここまでの話をほとんど聞いていなかった S だが、「君も農民もアイルランドのものだ」という B の発言をきくと、「アイルランドが大事なのは、それが自分のものだからだ」("Ireland must be important because it belongs to me.")と言ってから、話題を変えようと提案する。(U- Δ 16.55-85)

Bが手元にあった「写実的な嘘をつく」『イブニング・テレグラフ』紙を読むと、パディ・ディグナムの葬儀に関する記事のなかで、自分の名前が「L・ブーム」と誤って記され、参列者の記載も不正確であることを発見する。Sが口蹄疫に関するディージーの投書を読んでいる間、Bはアスコット杯に関する記事を拾い読みする。近くにいた御者は、いつか新聞に

第 16 回 2022 年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会 2022 年 2 月 27 日

「パーネルの帰国」という記事が乗るはずだと言って生存説をほのめかすと、B はひと騒動あったときにパーネルの帽子を拾ってあげ、「サンキュー」という言葉を返されたことや、詐称事件であるティッチボーン事件のことを思い出す。《山羊皮》はパーネルの失墜を不倫相手のキティー・オシーに帰すると、B はパーネルの不倫騒動に関して独自の考察を行う。スペインの話題がでたことから B はモリーの写真を取り出して S に見せ、青年を妻に対して誘惑しようと試みる。(U- Δ 16.85-110)

時間は深夜 1 時近くになっており、B は昨日から(一昨日から?)何も食べていないという S を自宅に寄らせることを思いつき、勘定をして店を出る。右側から S の腕をとり、二人は居眠りをする夜警ガムリーのそばを抜け、ベレズフォード・プレイスを横切ってエクルズ通りへと向かう。道中、音楽についての話をするなかで S が歌ってみせた美声に B は驚き、テナー歌手としての稀有の才能を看見する。清掃器をつけた馬が湯気の立つ糞の塊を 3 つ落とす中、腕を組んで(arm in arm)帰路へつく B と S の姿が御者の視点から見送られる。(U- Δ 16.110-27)



図 2 "loop line," 1890, *South Dublin County Libraries*; "Postcard with a photo of the Custom House Dublin and a steamer moored alongside the quay. An advertisement for Clyde Shipping is visible as well as the railway loop line and Butt Bridge with its swinging centre to facilitate shipping traffic. Guinness barrels and horse and carts are visible on the quayside." (https://hdl.handle.net/10599/9714)